

SLAB-CITY

-The Proposal of Hyper den-City-

The Basic Type of Hyper den-City
The Metropolitan Building Typology
Layed-City Model

0.0.0:INTRODUCTION

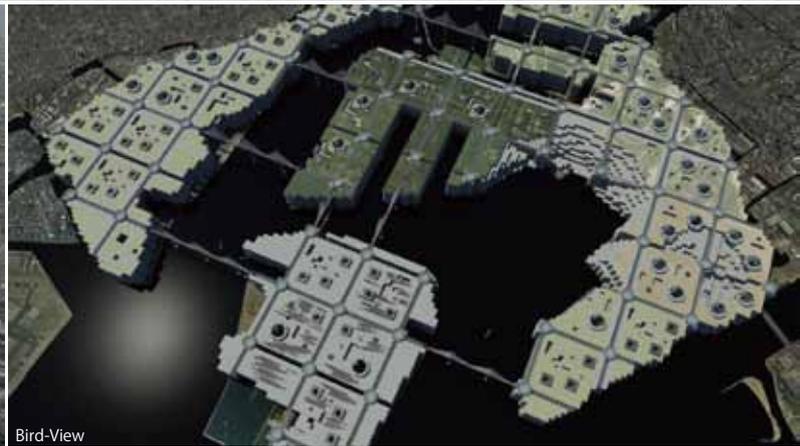
都市への人口流入が止まらない。国連の調査によれば 2050 年には世界人口の約 80 パーセントの人が都市に住むという調査結果が出ている。ここで問題として取り上げたいのは「都市に人口が集中しているという現象」である。3.11 の東北関東大震災は皮肉にもこの状況を加速させるであろう。人口集積を許容する為の更なる空間の高々度立体利用、人口集積を許容する都市へのアプローチが必要とされている。都市への人口集中が止まらないのであれば、人口が集積する事を前提としてこれからの都市空間を考えなくてはならないのではないだろうか。それは高密度をネガティブに捉えた上では無く、ポジティブに捉えた上での設計なのではないだろうか。従って、本設計で提案するのは、人口が超集積した都市=Hyper den-City である。SLAB-CITYはその最も基本となるタイプであり、床が過剰積層された都市である。



Section-Perspective



Inland → Bayarea



Bird-View

0.0.1:GLOBAL DIASPORA

国連の予測では、世界人口は 2050 年には 100 億人を突破するとも言われている。その増加する人口の大半は先進国ではなく、アジア、アフリカ、南米などのいわゆる途上国 DEVELOPING COUNTRY で、そこでは、養うに足りる産業基盤が整備されているわけでは必ずしもない。経済よりも、近代化の端緒としての公衆衛生の普及や内戦の減少などによって死亡率が大幅に減少し、結果として人口が爆発していく。現在のグローバルな景気減速もそれに歯止めをかけるとは思われない。それらが安定するにはまだしばしの時間がかかる。この増加した人口はおそらく国内に留まることはなく、より安定した条件を求めて国境の外、豊かな経済を保有する先進国や職のある都市へ向けて流出していくであろう。芝浦工業大学八東研究室内で組織された UPG (URMAN PROFILING GROUP) では、この現象を「GLOBAL DIASPORA」と呼んでいる。先進国である日本も当然、この現象からまぬがれることは回避であろう。SLAB-CITYはこの GLOBAL DIASPORA を受け入れる事を前提とする都市である。

0.0.2:TOKYO BAY AREA

設計の場所は東京都の埋め立て地帯・湾岸地帯（具体的には東は荒川から西は多摩川までの間の埋立地全域）を想定する。ベイエリアは開発規模が大きく、土地のしがらみが小さい。数年でその風景を一変させる。ベイエリアはレム・コールハースの言うミュレーション=突然変異を引き起こす場所である。世界的なグローバルシティである東京という場所と、湾岸という場所との兼ね合いにおいて、東京湾岸地帯は超高密度都市が出現する可能性が最も高い場所として考える。



Tokyo-BayArea

Latitude/Longitude : 35° 40' N · 139° 45' E

Plottage : 36,35 km²

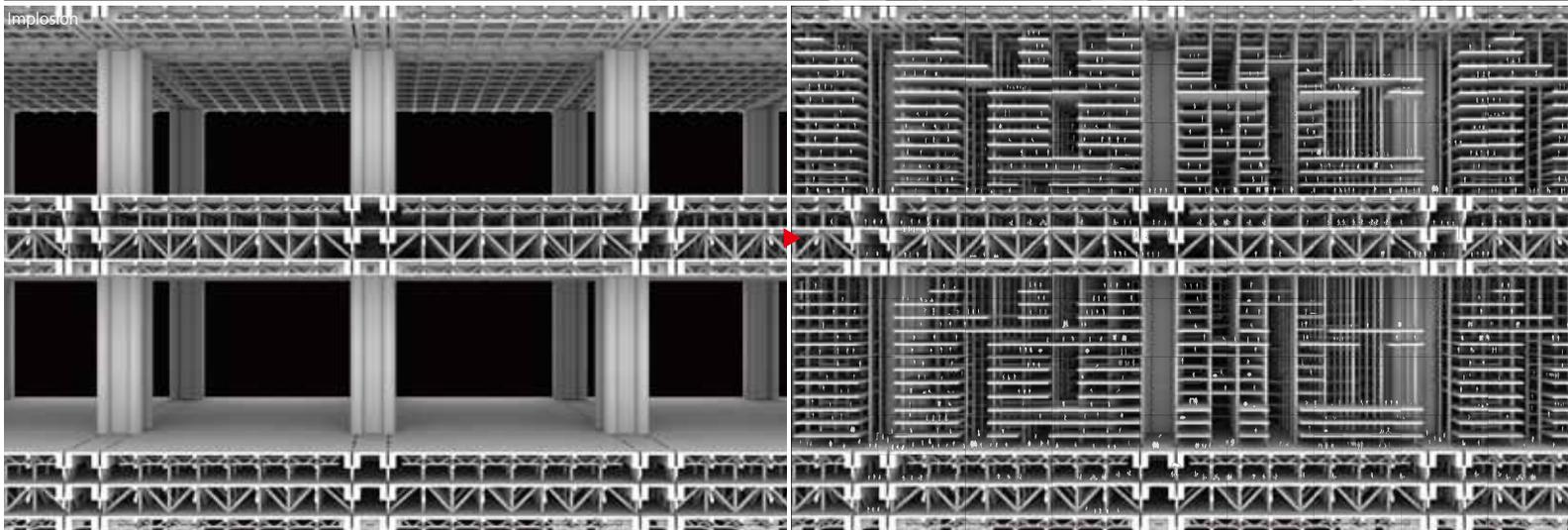
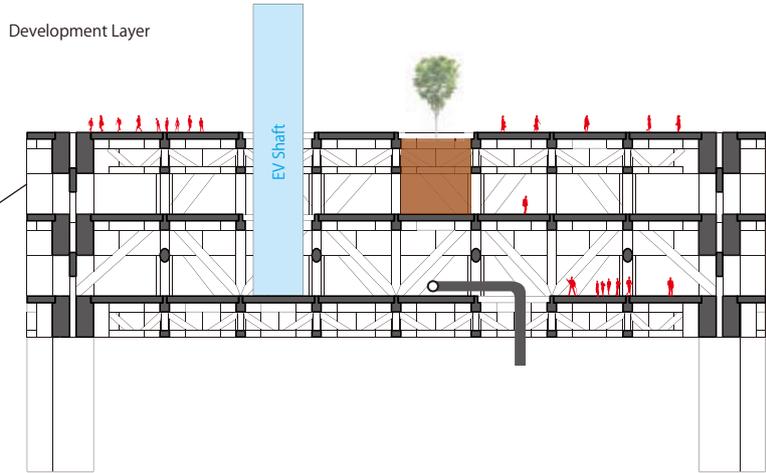
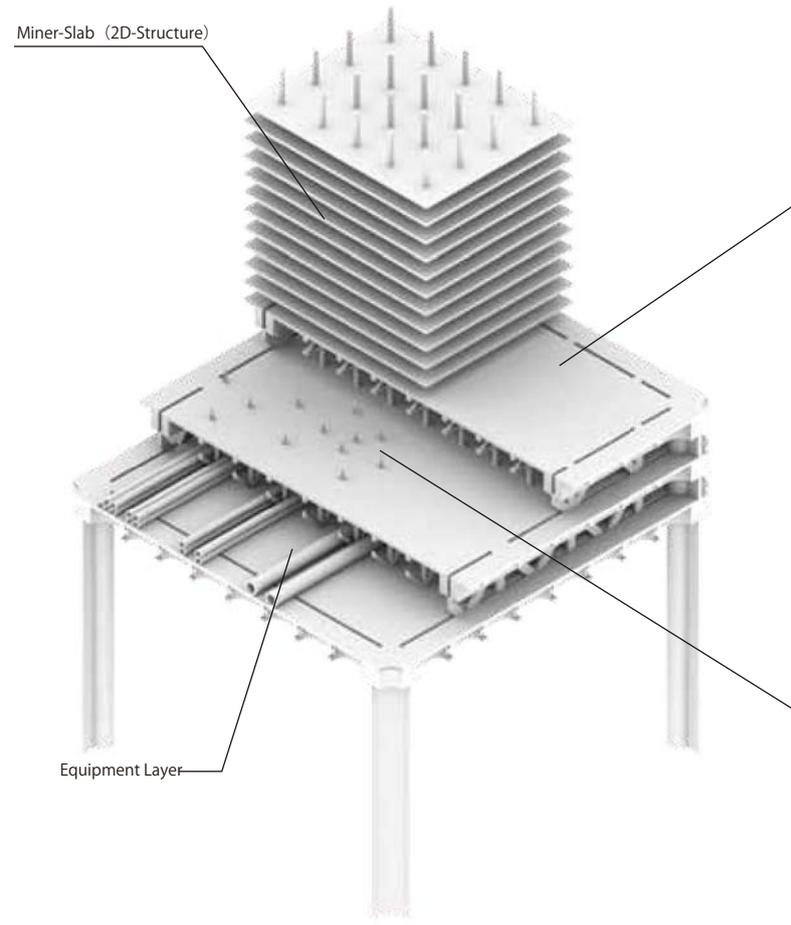


「グローバル資本主義における世界構造の変異 - 移民の人口移動シミュレーションと産業構造再編成 -」(2009 鈴木敏之) より。

1.0.0 : MEGA-SLAB

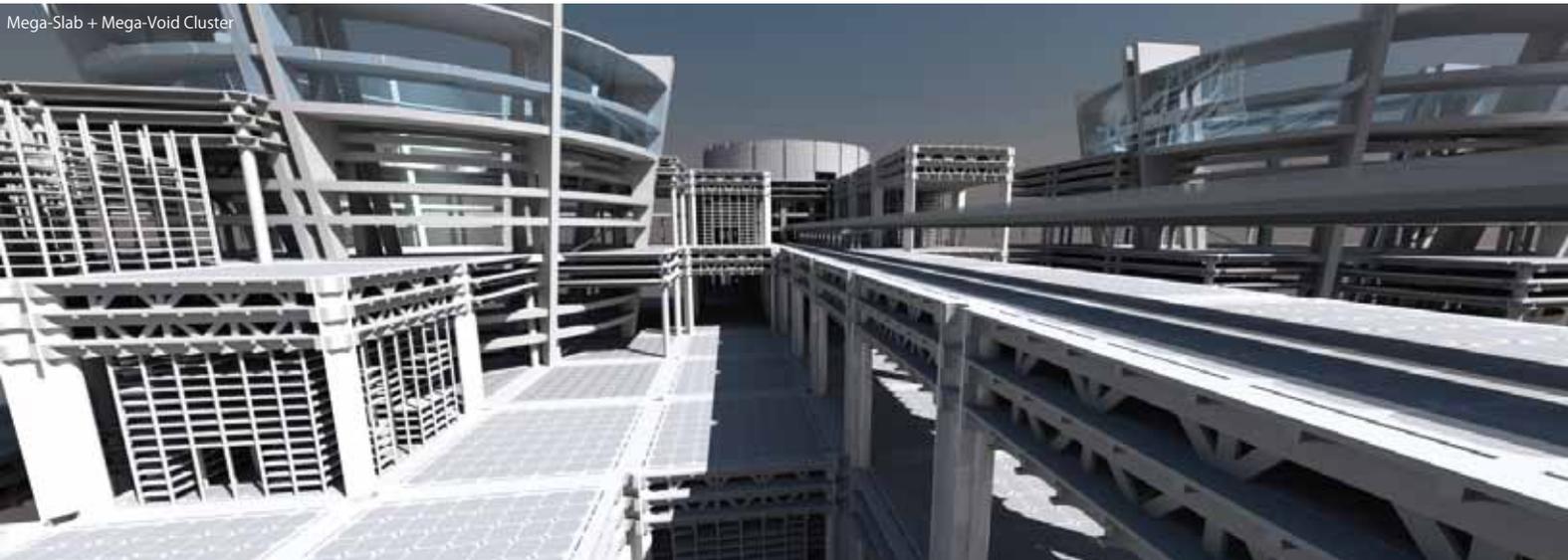
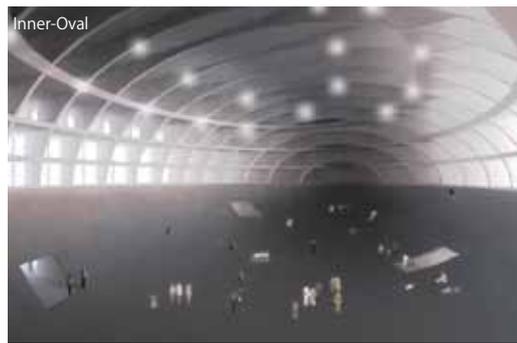
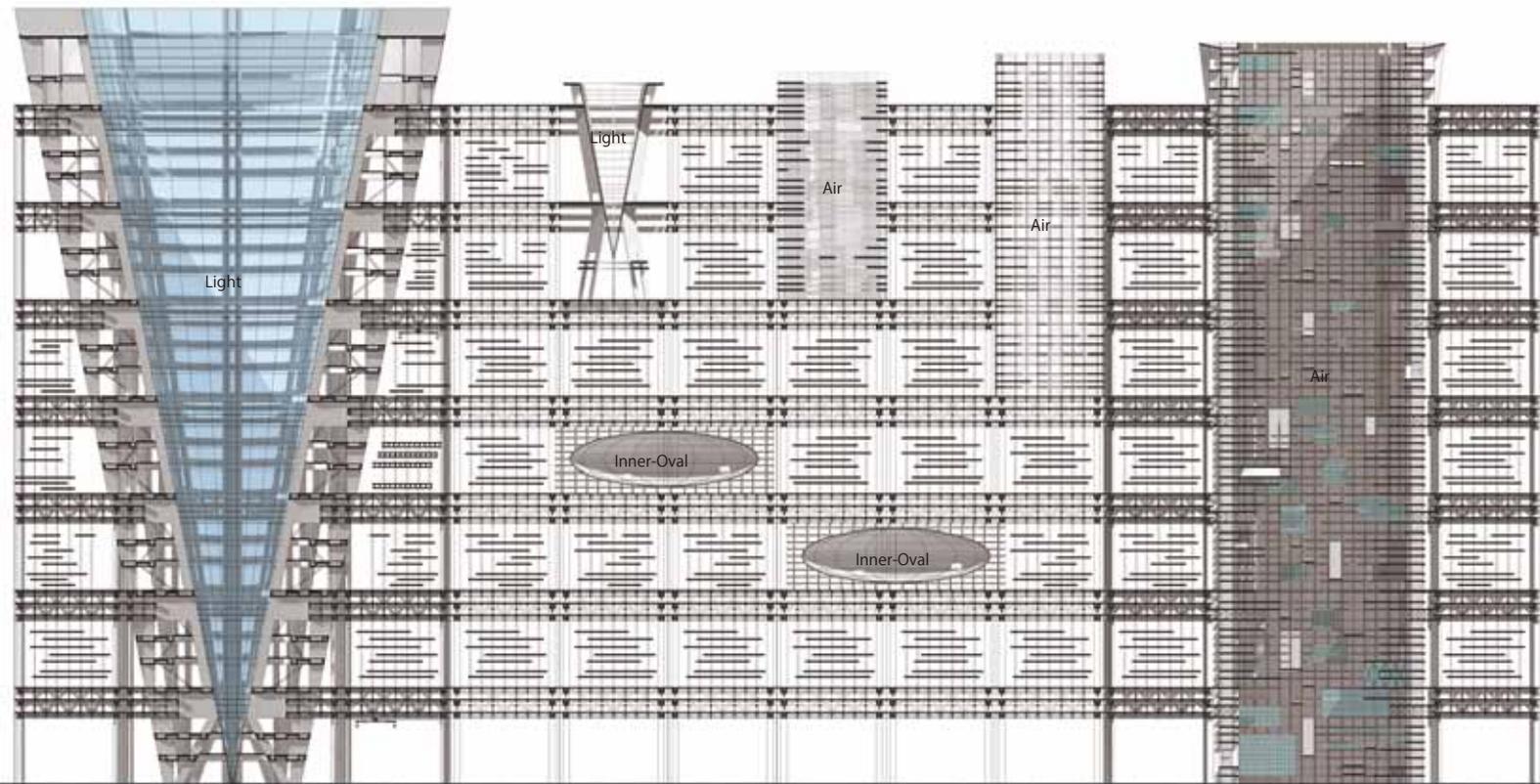
SLAB-CITYを構成する主要素として、メガスラブと呼ばれる人工地盤を提案する。メガスラブは3層構造で、上から開発層 (Development Layer)、交通層 (Personal Mobility Layer)、設備層 (Equipment Layer) となる。

メガスラブは単位で構成され、水平、垂直方向に連結していき、都市の人口許容量を拡大する。さらに連結されたメガスラブの上でスケルトンが充填され、都市の高密度化を図っていく。



2.0.0 MEGA-VOID

空間が超高密度化されると、空間の余白部分=ヴォイドの存在も重要となり、意味を帯びてくる。SLAB-CITYでは意図的にヴォイドを形成する構造体を設計し、都市の環境を担保する場を作る。ここでは主に3つのタイプのヴォイドを提案した。





3.0.0:CIRCULATION
 超高密度都市のサーキュレーションパターンとして、セグウェイ等のパーソナルモビリティ、EV やES 等の中小型ビリティの重合体を提案した。

サーキュレーションの主軸となるのは、ヴァーティカルサーキュレーションコア（以下 VCC）と呼ばれる複数の交通機関がパッケージ化された垂直動線である。これを基点に水平方向のサーキュレーションとして、LRT が通る LRT-Path や海上を渡る Bridge、さらに物流動線のヴォイドなどを提案した。

